

「今一度本腰を」

代表理事 金尾 健司

昭和61年9月、建設大臣から河川審議会会長に対して、「超過洪水対策及びその推進方策はいかにあるべきか」について諮問がなされた。翌年3月に出された答申の中で、人口・資産の集中、さらには中枢機能等の集積の傾向がますます顕著となっている東京、大阪等の大都市地域では、仮に計画の規模を上回る洪水等が発生した場合においても、もはや破堤による壊滅的な被害の発生は、許されない事態となっている状況から、このような地域を控える特定の一連区間において、新たに高規格堤防を強力に推進すべきとされた。

この答申を受け、昭和62年度から高規格堤防が新規に事業化されることとなった。そして、年度末に開催された河川審議会の審議を経て、関連する水系の工事实施基本計画、いわゆる工実の改定が行われ、整備区間が示された。

私は、工実改定の担当係長として、この改定作業に携わった。約870キロの高規格堤防というのは壮大な計画である。河川審議会の議論の中で、農水関係の委員から強硬な反対意見が出されたと記憶しているが、原案のとおり認められた。当時はバブル期の右肩上がりの時代であり、すんなりと受け入れられたように思うが、例えば、利根川水系では、大都市地域を控える一連の区間は、利根川上流と江戸川の右岸側であるにもかかわらず、上下流・左右岸のバランスを考慮してのことか、左岸側と利根川下流区間も整備対象となった。超過洪水対策に地域バランスを考慮すべきなのか、難しい問題だと感じた記憶がある。

時を経て、平成22年の行政刷新会議による事業仕分けにおいて、高規格堤防整備事業は、「現実的な天災害に備える視点に立ち、治水の優先順位を明確にした上で、事業としては一旦廃止」することとされた。しかし、その後発生した東日本大震災を教訓に、有識者の検討会における議論を踏まえ、抜本的な見直しが行われた。その結果、「人命を守る」ということを最重視して、整備区間を従来の約870キロから、「人口が集中した区域で、堤防が決壊すると甚大な人的被害が発生する可能性が高い区間」であるゼロメートル地帯等の約120キロに限定することとなった。

それから、約5年経った平成29年には、あらためて有識者の検討会において、高規格堤防の現状と課題等について幅広く議論し、効率的に整備を推進するための方策が提言された。

事業化から約30年を経て、約120キロに対して整備済みは約14キロであり、多くの区間が未整備

で残されている。一方、推進方策については、これまでに検討を積み重ね、一般論としてのアイデアは、ほぼ出し尽くされたのではないかと思う。こうした状況をかんがみると、高規格堤防については、今一度本腰を入れて取り組む時期を迎えたのではないかと思う。

今必要なのは、実際に現場に入って、これまでの検討成果をどう活かすのか、また、それでもうまくいかない場合にはどうするのか、関係者がひとつになって汗をかきながら知恵を絞り、現場に即した解決策を見出すことではないだろうか。

その点から言えば、河川管理者の役割は大きいと思う。沿川の市街地整備の機運が落ち着いた現在、河川管理者が待ちの姿勢ではなく、積極的に動かなければ、新しい事業展開は望めないと感じている。

また、事業仕分けによって世間には高規格堤防は中止となったという誤解があったり、沿川住民の間でさえ高規格堤防の認知度は低いと聞く。民間デベロッパーの間では、高規格堤防と一体となったまちづくりの将来像が見えないという声も聞く。そこで、高規格堤防のてこ入れ策の第一歩として、高規格堤防と、これと一体となるまちづくりの全体像を示すことが必要ではないだろうか。

平成6年に都市局長と河川局長の連名で通知が出されている。その中には、都道府県都市計画部局と河川管理者は、共同で、高規格堤防等と沿川地域の市街地の整備等に関する基本構想を策定することとされている。この通知に基いて各河川で構想が策定されたが、すでに17年以上の年月が経過している。社会経済条件が変化した現状に合わせて、この構想を見直すことにより、高規格堤防整備の全体像を示すとともに、認知度の向上を図ることができるのではないだろうか。このことにも、河川管理者の積極的な姿勢を期待したい。

最後に、リバーフロント研究所の役割について触れたい。高規格堤防は、多くの関係者が関わり、土地や建物に関する複雑な制度が絡むなど、高度な調整を必要とする事業である。そして、市街地の更新と歩調を合わせながら、街そのものを作り変える、息の長い事業である。リバーフロント研究所は、長く高規格堤防に関する調査・研究を行い、河川と都市の両面からの専門的な知見を蓄積してきた。このことを活かし、中立的な立場から関係者間の調整の一翼を担うことにより、高規格堤防の推進に貢献できるよう努力していきたいと思う。